

范小平著『四川崖墓芸術』

巴蜀書社，2006年4月刊，192頁，28元

濱田 倫子

本書は、范小平氏によって書かれた四川崖墓に関する学術書である。100年来の巴蜀地区の考古資料を基にして、考古学、美術学、宗教学、民俗学などの様々な学問分野から、同崖墓につき体系的かつ科学的に分析を試みた画期的な書物である。著者である范小平氏は中国漢画学会の理事職を始めとし、四川省歴史学会の理事など多くの関連組織で要職を務めている。また、文物及び美術考古に関する論文を70篇余り書き、それらを国内外の学術刊行物に発表している。これらの事実から、范氏がこの分野に造詣が深く、第一線で活躍している研究者であることがわかるだろう。

はじめに四川崖墓について簡単な説明をしておきたい。四川省は古くは“巴蜀”と呼ばれた、地理的には都から離れた辺境に位置していた。そこに住む人々は“西南夷”という蔑称を与えられ、漢族とは異なる風俗習慣を有する異民族が多く居住していた。ところが秦漢時代に中原の支配下に入ると、巴蜀地区への大規模な漢族の移民政策が実行され、葬送習俗においても土着民族と漢族との融合が図られていき、次第に独特の墓葬が現れ始める。それが、本書の扱う「四川崖墓」である。

「崖墓」とは、崖に穴を掘って居室を設け、そこに棺を安置する墓葬のことを言う。一つの広い崖壁に何十もの穴が横方向に掘られており、外部から見れば蜂の巣のような形態をもつ。巴蜀地区の土着民族の間では、有史以来、断崖絶壁の岩肌に楔を打ち込んでそこに棺を放置する墓葬や、崖壁に簡単な穴を掘りその中に棺を安置する墓葬が存在していた。一方、後漢時代には広範囲にわたって石造の画像石墓が流行しており、住居の如く造られた墓室内は様々な図像で装飾されていた。つまり、「四川崖墓」はこれら両者を融合したものであり、後漢時代の住居のような崖墓内には、華やかな石造のレリーフが施され、ユニークな造型をした明器が随葬されていた。考古学者の羅二虎氏によれば、この墓葬の担い手は土着の習俗を吸収した漢族であろうと言われている。

さて、本書における著者の主眼が、同崖墓内の石刻や明器など芸術面に置かれていることは確かである。しかし、墓中に配された図像や造型には墓主の死生観が色濃く反映されており、その意味で墓中の芸術と宗教とは密接不可分の関係にある。従って「四川崖墓」という中原地域とは異なる墓葬を取り扱い、そこに全面的に考察を加えた本書の誕生は、広く古代中国の死生観を明らかにするという点において宗教学の立場からも歓迎すべきことであり、今回本書を書評する意義はまさにここにあると言って良い。

それでは論評に入る前に、まず本書の構成を確認しておくことにする。

- 第一章 100年来四川崖墓的発見与研究
- 第二章 四川崖墓的時代及其分布狀況
- 第三章 四川崖墓的類型結構及地方特色
- 第四章 四川崖墓与周辺崖墓比較
- 第五章 四川崖墓的芸術成就
- 第六章 四川崖墓石刻在中国美術史上的地位
- 第七章 四川崖墓石刻所反映的中国民俗芸術
- 後記
- 主要参考文献及図片出处
- 図録

まず、第一章においては、最近100年間の四川崖墓に関する研究史をまとめ、その成果を評価している。同章は三節から構成され、第一節では四川崖墓に対する西洋人学者の関心について、第二節では同崖墓に対する中国人学者の関心について、そして第三節では同崖墓の研究体系の形成について論じられている。第一節では、19世紀末から20世紀初頭にかけて、英国のベーカー (E. Colborne Baker) や仏国のセガラン (Vieter Segalen) ら西洋人学者によって、同崖墓が再発見されることになった経緯を説明している。そして、外国隊の考古調査を経てその存在が次第に明らかになり、彼らが著した出版物によって中国国内の学者にもその重要性が認知され始めた様子を時系列に従って手際よく纏めている。第二節ではそれを受けて、1930年代からの中国人学者による同崖墓研究の開始とその進展の様を描く。金陵大学の商承祚教授はその草分け的存在であり、崖墓石刻芸術に関する論文を発表したほか、新津から岷江流域にかけて考古調査を行い、麻浩崖墓等の墓葬が後漢時代のものであることを定義づけた。それ以降、発掘される崖墓は次第に数を増し、墓室の内部構造など建築様式も少しずつ明らかとなる。第三節ではそれまでの研究を礎にして、1950年代以降四川崖墓の研究体系が形成されていく様を描く。1980年～90年代にかけては長江三峡ダム建設による考古発掘が進められ、同研究において新しい成果が次々と生み出される結果となる。このような研究の隆盛を受けて、1992年と1998年には漢画と崖墓を主題とした学術討論会 (中国漢画学会) が催され、成功を収めた。最近の10年間にも崖墓考古の成果は連綿と報告され、研究領域が引き続き拡大していることから、著者は同崖墓の歴史的地位と学術的地位の重要性を説いて章の締めくくりとしている。

続いて第二章では、四川崖墓が造営された年代とその分布状況を、関連の図表を援用しながら説明する。著者は紀年崖墓と考古報告とを突き合わせる手法を採用し、第一節では「文献中の四川崖墓」、第二節では「四川後漢崖墓」、第三節では「漢以降の四川崖墓」について論じている。その結果、四川崖墓は後漢から明代に至るまで約1300年の間に、長江中・上流域の支流一帯を中心として、他の墓葬形式と並存する形で造営され続けていたことが明らかとなった。とりわけ、厚葬概念の強かった後漢時代に芸術・建築等の技巧が最高潮に達し、それ以降は墓室装飾が単調になり、墓室構造も多室から単室へと簡便化されていく。著者はそのような崖墓の栄枯盛衰の様

を正確に記述している。

そして第三章では、四川崖墓の類型・構造と地域ごとの特色について論じている。各地の崖墓は一般的に河川に沿うか或いは溪流に沿った台地や山上に造られ、崖を穿って洞穴とし、それを墓とする「無土葬式」という形態をもつ。また墓室の構造には、単室墓・多室墓・家族墓などがある。著者は「建築芸術」と「造型芸術」という判断基準から四川崖墓の類型を成都地区、涪江沿鄞江流域地区、川東南地区及び巴渝地区の四箇所とし、その地域ごとの崖墓の特徴を示している。著者の主な関心は、地理環境や現地の社会経済などの影響を受けて、各々の崖墓の発展・変化に見られる規則性を明らかにすることにある。

第四章では、前章より検討する地域を拡大して、雲南省・陝西省などの周辺崖墓と四川崖墓との比較を行っている。これは地理環境、造営年代、墓室工芸などの面から三者の比較を行うことで、それらの共通点や相違点を浮き彫りにし、結果として四川崖墓の輪郭をより明確にしようという試みであろう。西南地区及び南方地区に流行した無土葬式には、懸棺、崖葬、崖墓の三種類がある。今までこの三者の定義は曖昧にされ、混用されてきた。その中でも比較的説得力のある定義として、著者は以下の芮逸夫氏の説を紹介する。すなわち「懸棺は崖壁に釘を打ち込み、その上に棺をかけるものであり、崖葬（崖壙）は崖を穿って壙となし、棺をその中に安置するものであり、崖墓とは穴を穿って部屋を築き、その中に棺を納めるものである。」と。これを踏まえ、著者は発掘成果をもとに、地理位置・葬式・葬具・陪葬品・族属・時代・墓穴装飾などの観点から、三者の性格に対し次のような分析を行い、以下のことを導き出した。すなわち、懸棺葬及び崖葬は現地の土着文化の影響を受けたものであり、明らかな地方民族の特徴をもつものである。一方、崖墓葬は後漢以降の漢民族の葬式であり、同時期の磚室墓、土坑墓と同じく中原漢文化の影響をかなり受けており、文化形態上、地方及び中原文化と沢山の共通点をもっており、これは晩期巴蜀文化特有の類型であるとしている。

一転して、第五、第六章においては、四川崖墓の内部のみに目を向け、その芸術的成果について論述していくことになる。具体的には、第五章では崖墓内の陪葬俑、石函、揺銭樹、壁画の四節を設けて考察を加えている。同崖墓の陪葬明器の中で、最も特徴的で普遍性のある明器が陶製の俑（人形）である。陶俑は漢代の社会生活を濃厚に反映する彫刻物であり、農夫俑や武士俑、楽舞俑など様々な階層の人々の造型が生き生きと写実的に刻まれている。同節の解説からは特に説唱俑の芸術性を高く評価する著者の興奮が伝わってくる。そのような後漢期の四川崖墓俑は当時の厚葬風俗を反映したものであると共に、厳しい階級社会にあっても貴族から平民に至る多くの人々が追求した豪華な享楽生活の産物であると言える。同様に後漢時代の四川墓葬から多く出土するものに、揺銭樹があげられる。揺銭樹は中国神話伝説中の神樹にその由来もち、その樹の葉の間には親指大の後漢の銭と同じ形状をしたものが多数取りつけられている。著者は基座を中心に同樹の造型やそこに刻まれている図像を細かく検討し、それが一種の宗教的な崇拜対象であるという見解を示し、理想的な神仙世界に辿りつくための“通天樹”であろうと結論づける。

続いて第六章では、中国美術史上における四川崖墓石刻の地位を明らかにするために、第一節においては建築芸術について、第二節においては人物造型芸術について、そして第三節においては動物及び図案装飾芸術についてそれぞれ検討を加えている。著者は同崖墓の芸術を石刻芸術と冥器芸術とに分けて考えており、墓室、中心柱、門楣などに刻まれた石刻装飾は後漢時代にその

ピークを迎えると言う。第一節では崖墓内部の建築構造を説明しつつ、そこに配された彫刻についても考察を行っている。そして住居の如く造られた墓室は中原地域の厚葬の影響を受けたものであり、その構造は神仙方術という道家思想を反映したものであると結論づけている。すなわち、西王母や東王公などの諸神仙が皆山上の“穴”を棲家としていたことから、山を穿って室とする崖墓はまさにその神仙思想を具現化したものであると推測している。ここでは四川崖墓にみる死生観に触れているわけであるが、このような観念が本当に存在したのかについて、“印象”ではなく文献などその根拠を明らかにしながら論じていかねばならないと思う。著者は崖墓の「闕」を「天門」と看做しており、その説明では墓中は天中に相当することになる。つまり、崖墓に納められた墓主は始めから天中に埋葬されたことになり、昇天（昇仙）の必要はなくなる。ところが著者は、別の箇所で「大型崖墓中の華美な石刻装飾は、魂気を昇天させ、形魄を地に帰す効能がある」とも説き、昇天行為の存在をほのめかしている。この死生観の矛盾について是非説明が欲しいところである。

さて、同章において興味深いのが、第二節の末尾に掲載された「人像造型芸術の一覧表」であろう。類型、崖墓位置、社会内容、所処位置、参考著述等の項目に分けて作成された同表はなかなかの力作であると言える。惜しむらくは、これが何のために作られたのかその目的が明記されていないことである。評者の感覚としては、同表は図像の配置規律を割り出し、そこから死生観を追究していく際の基礎研究に相当するものと思われるので、今後その方向での活用を期待したいものである。

終章である第七章においては、四川崖墓石刻に反映された中国民俗芸術について考察することに主眼が置かれる。第一節では同石刻中の性的モチーフに関する研究を行い、第二節では同崖墓を東南アジア及び西アジアの崖墓と比較検討し、第三節では同崖墓彫像中に見える仏教芸術についての分析を行っている。これらの三節を“中国の民俗芸術”として一括りに論じることの妥当性については慎重に検討されねばならないと思うが、それについては後ほど触れることにしたい。四川省の漢代墓葬からは性的モチーフを表した画像磚・画像石が多数発見されており、第一節ではそれらを集めて、“秘戯”、“燕婉（男女の接吻）”、“生殖器崇拜”、“生殖現象崇拜”などのように図像の分類を行っている。それらの性画像は、内容がストレートで、表現技巧が素朴で遅しく、その意味するところは古蜀時代の民間芸術家による生命の肯定や生命繁衍の賛美であると言う。著者は同地域で性画像が散見されることの原因として次の二点を挙げて説明する。まず、①野外性交などの原始文化の遺風をもった漢代巴蜀地区の民俗文化によるものであると述べる。そして、②漢代には統治者の間に淫乱の風が起り、宮廷女官による裸体歌舞や雑技などが盛んに行われたことから、死後も美女の同伴なしではいられず、従って墓室中に性文化が溢れたと論述する。②に関しては、大きな疑問が残る。つまり、後漢時代に儒家の影響下にあった中原では露骨な性画像を墓中にあしらうことは忌避されており、皇室の墓中に性文化が溢れていたという考古事例を評者は未だ聞かない。思うに、著者は四川という「地方」と「都」である中原とを取り違えており、地方の墓葬事例を説明するのに、中原の皇室の生前の在り方を根拠にするやり方は改めねばならないだろう。

さて、序において李紹明氏が本書を高く評価し、突出した貢献であると賛美したのは、四川崖墓研究を通じての著者の“仏教の南伝系統”についての論証であった。そして、その内容は同章

の第三節においてまとめられている。中国への仏教の伝播には二系統があり、それが中国北西部のシルクロードを経由して流入した「北伝系統」と、南アジアから中国南方の雲南—四川—湖北などの地区に伝えられた「南伝系統」である。従来の仏教研究においては、仏教遺物が多く現存する北伝系統が重要視されてきたが、近年になってようやく南伝系統にも光が当たるようになってきた。四川崖墓には後漢時代に仏教が流入した頃の古い仏教遺物が多数残されており、南伝系統の存在を確固たるものにする有力な物的証拠を提出している。著者は同石刻や揺銭樹上に配された仏像の図像を収集し、流入した当時の四川地区での仏教崇拜の在り方を検討しており、大変興味深い。外来の宗教の尊神である仏像が、中国土着の仙人である西王母の図像と結びついて墓中に出現する様子からは、仏教浸透の経過が読み取れる。このように、同節は考古資料を用いての宗教分野からのアプローチに独自性があるのであり、“民俗芸術”という括りでそれを捉える必要はないだろうと思われる。

以上、本書の内容を概観した。それらを簡単にまとめると、本書は次のような流れをもつことが理解される。すなわち序から第四章までは豊富なデータと挿図、写真等を用いて四川崖墓の地理的環境や時代背景、そして類型・構造などを詳細かつ正確に記述し、続いて第五章から七章においては自らの関心事である“芸術”の俎上に崖墓を乗せて、主に建築芸術と造型芸術の双方からアプローチを試みている。本書の意義は「四川崖墓」という地域的特性をもつ墓葬に焦点を当て、従来の研究成果を整理・編集し、今後の研究に向けての基盤を提供した点にあると思う。同崖墓に関する新たな考古発掘は現代に至っても陸続と試みられており、現段階で今日までの成果を一旦整理し、一書に収めておくことは大変意義深いことであろう。そして、それは長年崖墓の調査に携わってきた著者だからこそ成しえた作業であったように思われる。同崖墓研究が今後この一冊を新たなスタートとして更に発展していくことが期待される。

しかしながら、本書にも何点か懸念すべき点があることも事実である。具体的には、①四川省内外の他形式墓（磚室墓、画像石墓など）への目配りが効いておらず、結果として四川崖墓自身の特性をも掴み切れていないこと、②漢代美術史上に同崖墓の芸術性を位置づけることを目的としながら、漢代美術史の総体を明らかにしていないこと、③四川崖墓石刻に見られる死生観についての考察に深みがないことである。以下、その点につき検討を行ってきたい。

まず、①についてであるが、これは四川崖墓にのみ検証の的を絞った本書の独自性が、裏目に出てしまったことに因るものであろう。著者は四川崖墓について明らかにするために、四川省内外そして第七章においてはかなり飛躍して東南アジア・西アジアに存する崖墓との比較を行っている。しかしその割には、四川崖墓の特性や本質が見えてこない。これは崖墓にこだわって同墓葬間の比較に固執するあまり、漢代四川の他形式墓（土坑墓、磚室墓）や他地域の画像石墓との比較を避け、客観的な視点を欠いてしまった結果であると考えられる。

それに対し考古学者の羅二虎氏は、著書『中国漢代の画像と画像石墓』の中で同じく四川崖墓を扱っているが、異質な墓葬同士を突き合わせる手法を用いることにより崖墓だけでなく磚室墓や中原墓葬など各々の特質を見事に描き出し、加えて漢代の四川墓葬全体としての特質を捉えることにも成功している。言うまでもないが、「個」に執着し全体からの考察が不足すると、「個」自体の存在が宙に浮いてしまい、その実体を掴みきれなくなる恐れがある。その傾向が残念なが

ら本書において散見される。例として、第七章における四川崖墓と古代日本の九州崖墓との比較を見てみたい。同所において、著者は「崖墓」という形だけに着目し、比較対象として九州崖墓を安易に借用している。しかし、それを比較対象とする大前提として、まず全体として古墳時代の日本の葬制はどのようなもので、九州崖墓はその中のどこに位置づけられ、その造営背景にはどのようなことがあるのか等についてきちんと検証する必要があるのではないだろうか。全体に照らしての位置づけを行っていない四川崖墓に対して、同じく全体から切り離された九州崖墓とを比べてみてもさしたる効果が上がらないことは明白である。

懸念すべきことの二点目は、②漢代美術史の全貌に触れることをしないで、四川崖墓の芸術性のみを強調していることである。やはりこれも①の問題につながることである。本書のタイトルが『四川崖墓芸術』であることから見ても、著者が同崖墓の芸術性に関心を持ち、そこに光をあてながら、漢画という分野の中で正当な評価を与えていきたいという野心をもっていることは明らかである。例えば、第六章第二節「四川崖墓石刻の人像造型芸術」の冒頭において、著者は次のように述べている。

「崖墓画像石刻は中国漢画というこの美術体系において、とりわけその中でも中国民間美術発展史の中において重要な地位を占めている。(傍線部は評者による)」

もしそのことを主張したいのならば、当然、“中国漢画”及び“中国民間美術発展史”についての説明がまず必要となるはずだ。つまり、その大まかな像を読者に提示した上で、崖墓画像石刻の優秀性を説かなければ、著者の主張は説得力を欠くものとなる。しかしながら、氏は第五～七章を通じて崖墓芸術について言及するのみで、結果として同芸術の核心から遠のいてしまうという悪循環に陥っている。また、同5～7章において、“民間”や“民俗芸術”という用語が頻出しているが、これらの定義についても明らかにする必要があるだろう。その上で、その対極にあるであろう概念、例えば“官営”或いは“宮廷芸術”のような存在を明らかにし、両者の比較を行うべきだと思う。この作業を行わない限り、漢画の中に適切に崖墓芸術を位置づけることは出来ないものとする。また、もし四川崖墓石刻や壁画などを民間美術とした場合、画工や依頼主の性格を鑑みると、山東や河南の画像石、中原地域の墓室壁画等までもが民間美術という枠組みに収められることになる。加えて、後世まで連綿と続いていく墓室壁画も民間美術として扱わねばならないであろう。この枠組みは果たして妥当なものなのであろうか。著者はその点を意識して、類型の検討を慎重に行う必要があるだろう。

そして、古代中国の死生観を研究する評者にとって消化不良に思えたことは、③四川崖墓石刻に見られる死生観についての考察が乏しいことである。著者によれば、後漢時代の崖墓は当時の厚葬風習によるところが大きく、同石刻には神仙思想と道家思想とが色濃く反映されていると言う。その見解はひとまず妥当であると思うが、残念なのは氏の考察がそこで終わってしまうことである。ここからさらに踏み込んで考えなければいけないのが、儒家思想との関連についてである。後漢当時には儒家思想が隆盛を極めていたが、それを図像化したものは四川崖墓には殆ど見られず、中原や山東など同思想に大きく影響を受けた他地域の図像との差異は明白である。そしてこの差異は非常に重要であり、同崖墓の実体を知る手掛かりともなりえるので、著者には積極的にそれを考察する責務があろう。同時に、それが四川崖墓独自の特徴なのか、それとも磚室墓を含めた漢代四川地域全体の傾向なのかについて論じることも忘れてはならない。

また、考古学者の信立祥氏によれば、後漢の厚葬風習は儒教の祖先崇拜を背景にもつものであると説明されるが、それならば筆者の言う“四川崖墓にみる厚葬風習”は一体何に由来するものなのか。この点に関しても筋の通った説明を求めたい。

以上、解決されるべき点はあるが、考古・美術・宗教の各分野を横断して四川崖墓という地方墓葬に切り込んだ本書は、古代墓葬に対する新しい研究の在り方を提示した、価値ある一冊であると言えよう。